

評者は本書を「大著ではないが名著」と評価する。本文247頁、索引8頁という分量は決して大きくはない。名著と評する理由は以下の通りである。①深い学識に立脚し②論旨明快な構成であり③古文に親しみのない読者でも読みこなせるための工夫が凝らされ④したがって広範な他領域の若い読者にも勧めることができるからである。

評者は、様々な学部にも所属する、今年大学に入

学した学生を対象とした、「歴史と人間社会」と題する講義を担当している。この講義の参考書に、本書を推薦する予定である。

(日野 秀逸)

〔法政大学出版局、〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7、2006年10月、B6判、255頁、2,500円+税〕

香西豊子 著

『流通する「人体」——献体・献血・臓器提供の歴史——』

本書は臓器売買の現実を追ったルポルタージュでもなく、移植医療における倫理的な問題点を洗い出したものでもない。著者の言にしたがえば、『人体』という言葉遣いがある種の社会性を具現しているという洞察のもと、流通する『人体』の歴史を記述し、人体をめぐる作動する言葉の『偏向』を跡づけることが目的であり、そのために「ドネーション（『人体』の流通）という事象に内在する論理を、可能な限り一次資料にそって記述する作業をおこなってゆく」と同時に、ドネーションにかんする（二次的な）資料の記述の振幅をとらえ、その意味あいについても考察をくわえてゆく」というものである。

具体的には、解剖体のドネーション、血液や移植片（角膜・腎臓・その他の臓器）のドネーションの中で、あるいは人体標本展覧会という場において、身体がいかなる論理のもとに置かれていたのか、それぞれの時代における身体の歴史的固有性を明らかにする作業、「事象がそのように配列される事由を、語りの生まれた場のなかから引き出そう」とする歴史社会学的な営みを指している。

まず解剖体のドネーションに関しては、「近世の腑分けには流通と呼べる動きを可能にする言葉の分断は見あたらず」、ドネーションは明治以降に派生した事象であるという。明治期の解剖は試し斬りと同じく「残酷」であっても、医学の進歩と人民の幸福をもたらすという「言葉による毒抜

き」によって禁止を免れ、死体をめぐる慣行と拮抗しながらも身体の流通が可能とされていく。そのうえで、年々と高まる解剖体の需要に対しては、生前の無料の治療との引き換えに死後の解剖を許諾させる「施療」の論理と、引き取り手のない「取捨」の遺体を養育院・監獄・精神病院などからもらいうける際の「無縁」の論理によって、供給不足の克服が図られる。一方、数少ない特志（篤志）解剖は『奇特』なもの、『習俗』とは相容れない剰余」として、大正末期には黙殺されていくことになる。

だが、戦後において「施療」「無縁」にもとづく解剖体の調達が困難になると、これまで散発的にしか見られなかった「特志（篤志）」に目が向けられ、供給源としての組織化が図られることになる。そのなかで生まれた献体運動は「遺体寄贈という個人の奇蹟的な志」ではなく、「篤志の発露」に衣替えすることによって推し進められたが、やがて献体運動は移植医療との競合という問題を抱えることになる。

他方、今までみてきた医学の研究・教育に資するための解剖体とは異なって、血液や移植片（角膜・腎臓・その他の臓器）におけるドネーションでは、流通可能な形態に加工させるための技術が必要なこと、血液においては無記名化と混合化によって識別不能な状態になっていること、移植片においてはドナーとレシピエントとを媒介する

大がかりな機構が必要なこと、などの違いがみられる。

まず血液のドネーションにおいては、売買血方式から預血方式、そして献血方式へと変化してきている。その背景には1960年代、供血者の「安全」が損なわれるような事態の表面化があった。それを克服し献血方式へ集約させる過程では、「患者への『贈物』である『善意』の献血が『安全』でないはずがない」とする『有償＝危険』『無償＝安全』の論理が作用したという。

次に、なかなか進展を見ない移植片のドネーションについては、そのこと自体、「人体が何より慣行のなかに埋め込まれて存在」していることを示しているのであって、ドネーションの推進のためには、死体に対する集合的な「風習」「習俗」、ドナーの死の判定法や死体の処分権を持つ遺族の同意をめぐる問題などで折り合いをつけなければならない。移植に関わる法制化が行われたあとは「習俗」などに代って、「献体の意思を尊重」という「本人の意志」が優位に立つようになり、その「意志」がドネーションを引っ張って行くこ

とになる。

そこでは移植片も「限定的な対象に対してではなく、『愛』や『善意』の発露を受け入れる機構に対して提供される」ものとなり、「ドナーとレシピエントの距離は追尾できないほどに隔絶し、実質的には無きに等しく」なる。そして、「献体された『いのちの贈り物』は、将来的に医学の恩恵として『社会』に還元される」ことになる、と意識されるに至る。

以上、少し飛ばしながら概略を試みたが、著者のいささか生硬な言い回しもあって、十分に文意を理解し紹介しえたかどうか心もとない。視点のユニークさは感じられたが、それを丁寧に噛み砕いて伝える工夫が、もうひとつほしかったように思う。私の興味を誘ったのは、前半の解剖体の流通に関する一次資料の部分である。丁寧な注もあり、後学に資するところが大きい。

(新村 拓)

【勁草書房、東京都文京区水道2-1-1、2007年7月、A5判、352頁、3,500円＋税】

トルステン・デッカート 著、大森安恵・成田あゆみ 訳 『ハーゲドン 情熱の生涯——理想のインスリンを求めて——』

伝記として大変面白かった。これはハーゲドンの人生そのものが、波乱にとんだものであり、彼がエネルギーに自分の仕事に励んだからに他ならない。

彼の誕生のころ、膵臓が糖尿病に関係しているらしいとか膵臓のランゲルハンス島から糖尿病発症を予防する物質を分泌していると考えられた。そんな時代に弱冠26歳で一般医として開業しながら、血糖測定法を研究しその学問的な興味をもち続けたことから、ノーベル賞学者のクローと共同研究することになり、プロタミン・インスリンを開発し、ヨーロッパにおけるモデル病院や研究所を設立して、医師であり、化学者であり、製造業者であり、実業家として八面六臂の活躍をした

ことにある。

誰でもこれをまねすることはできないが、学者として実業家として成功した人物像が、興味深く書かれている。

その生い立ちも船長の父のもとで、航海船で生活した特異な生活環境を積極的に受け入れ、開拓魂が培われたのかもしれない。

1922年、インスリンはバンチング・ベストによって発見されたと素直におもっていたが、この書からインスリン発見の業績はマクラウド・コリップにこそあることもよく理解できた。そしてクロー夫妻のアメリカ旅行からえたインスリンの新知見からハーゲドンとの共同研究が始まったのである。